

〔Ⅱ〕 討論要旨

◎討論は、齊藤・岩本両報告を一括して行なわれた。

◎菅野（正）（司会）……今日の両報告に即して農村自治を考える場合、次の二点がポイントとなろう。第一に、農村の自治的生活活動に対する農民の関わり方（右翼的・農本主義的なものや左翼的影響をもったものなど）と、国家・地方自治体の関わり方の、両者がどう関連しているかという問題であり、第二は、農村自治の今日の問題性が良かれ悪しかれ「村落見直し論」の評価にかかわりをもっているという点である。

◎細谷……岩本報告は農民運動の次元で、同じ基盤の上で左翼的農民運動が右翼的なものに吸収されていることを述べたが、これは村落構造の次元でもいえるのではないか。戦前の農村自治を考え

る場合、①地主制、②耕作農民上層、③それらを吸収する体制の側の機構の関連が問題となる。保守対革新という「二軸的発想」では把握できない。

◎岩本……庄内の場合、同じ組織体が農民運動・産組運動・実行組合・皇國農村体制に組みこまれてくる。村山の場合、運動体がいったん断絶したとき、残された農民がのりかえている。結局同じことだが、「農民運動は社会主義運動ではない」という視点からみると庄内のはうが典型的な「農民運動らしい農民運動」といえるだろう。

◎大川……宮城県とのつながりはどうか。

◎岩本……山形高と二高・東北大の運動とのつながりはある。宮城の場合はシンボリックに運動がまとめられているが、山形の場合は庄内と村山のナシヨナリズムがある。

◎菅野（正）……山形の場合、小作争議の中心者がのちに県議會議員となったり本間家とつながったりしている。特に、昭和恐慌期の農村を考える場合、そうした人物が小作争議のエネルギーを國家に媒介していったことが重要な意味をもつ。

◎岩本……こういう人たちは合理主義者であり、「ソロバン」があればやるという性格をもっている。

◎細谷……農本主義者ではなく、もはや名望家でもない。

◎菅野（俊）……山田盛太郎氏が、大正末期の日農の成立の時期に、そこで初めて農村の階級の問題が提起されたと書いているがそれ以前は農民一揆ということになるのだろうか。

◎岩本……山田氏の資本主義論は、現実の日本資本主義の展開の中で破綻した。分解するだけが原蓄ではなく、古いものを残しておくのも原蓄ではないのか。

◎菅野（俊）……後進性の問題であろうが、運動に火をつけるのはインテリゲンチヤであり、内側からでない点がある。

◎菅野（正）……そうしたパターンが一般的なのかどうかという点が、農村自治を問うとき重要となる。

◎大川……外からもち込まれた運動にいた農民と、つかなかったどちらか農民の、結局農村変動の主流をなしてゆくのかということが、農村自治の本質論につながる。

◎岩本……あらゆる動きを利用しようと構えているあたりが「自治的」ではないのか。

◎菅野（正）……沢内の集団移転の場合、内側のリーダーと農民はどう関係しているか。

◎斎藤……リーダーは上層農であり、規模拡大を期待している。

◎佐藤（勉）……農村の自治とはどういうことか。自分の生活に自律性をもっていれば自治なのか。もっと政治的なことか。

◎菅野（正）……自治には、権力の側と農民の側からの二面が常にある。これが歴史段階的には異なった現われ方をする。

◎細谷……地主が村を把握していた時期の方が國家の政策は直接入らない。他方大正末期以降耕作農民が力をつけ運動を展開するが逆に國家に直接的に組みこまれてくる。何を自治というかにより異なってくる。

◎岩本……自治は革新と直接的には結びつけられない。「農村自治」という言葉は戦前では右翼の専売特許であった。

◎菅野（俊）……今の自治を考える場合、主体性と権力、その対抗の問題がある。「ふるさとづくり」といっても誰が破壊したのか問われなければならない。

◎大川……自治の実態を何でかこうのかが問題である。その点で戦

前と戦後のかこい方が異なり、同じテーマを追求しながら混乱しているのが現状ではないか。

◎齊藤……戦後、村落共同体の残存、むらの解体、むらの見直しといった形で、戦前の「枠らしきもの」が問題とされてきた。また歴史的発想を飛びこして、政策論やそれを支える地域主義がでてくる。それで私は農村コミュニティの「ビジョン」を問題としたが、現実の場面でみるとそれもなかなかでてこないというのが現状である。

◎菅野（正）……コミュニティの範囲はどういうものが想定されているのか。

◎齊藤……普通は「学区」であるが実態としては部落である。

◎菅野（正）……コミュニティの場合は農民層分解を前提とした農村地域の資本主義的再編であり、「村見直し」の場合は資本主義そのものに農本主義的な面からチャレンジするという発想のちがいがあってはいないか。

◎齊藤……確かにコミュニティ論は都市との関わりで考えられてきたが、これが「村見直し論」と結びつく場合、発想自体が歴史的発展段階という立場をとらず、歴史貫通的なものを問題としている。

◎菅野（俊）……階級的に利害の異なるものをくくるといのが「上から」のものであるが、そうすると「下から」のものとは一体何なのか問題となる。

◎岩本……現実の農民は自治とかいう前にまず自分で物を作り食べてゆかねばならない。「自治」という言葉をいいたす農民はもはや農民ではない。農民自身の表現があるのでないか。

◎細谷……今の農村では食うだけでなく、それ以外の生活諸条件の

問題が、とりわけ生活機能を満足させた村が解体する中で出てきているのではないか。

◎佐藤（勉）……農民は支配されつつ利用している。生産組織が成功している例は農民のソロバン計算がある場合だ。そしてリーダー問題がある。長い目でみればリーダーの利害が実現されるようになっていく。主体的な人ががんばる構造があるようだ。

◎菅野（正）……構造改善事業でのいわゆる成功例は、それ以前から農民自身で計画化して逆に国を利用したものが多く。

◎菅野（俊）……それは「うまくいった」というのではなく、県もそれがねらいではなかったか。村に住んでいる農民の利害は相互にみな反する。構造改善にとびつきうまくやっている階層もあるが、そのみを評価できない。労働力を売っている階層もある。

◎細谷……確かに階級・階層差を無視して、欺まんにくくろうとするのは問題であり、階級・階層差による諸生活条件のちがいを重視しなければならぬということは大原則である。しかし今の農村で問題なのは、それをふまえた上でなおかつ共通の地域問題が生じていることである。その点が自治体問題や農協問題として問われている。

◎菅野（俊）……自治という場合、どのグループひ足におくかをはつきりさせないと、県の「ふるさとづくり」にのることになる。

◎大川……階層差をこえた共通の問題への対応の必要性は行政側の方が強く感じているのではないか。

◎齊藤……集落再編成は行政投資の効率化のためである。しかし生産基盤の整備をやればやるほど、はみ出した労働力の消化が問題となるし、都市の人間と同様の生活問題がおこり、それへの対応

も必要となっている。農村地域でそれらをやりつつ、うまく農民の地域社会として作り直すことは難しい。

◎菅野（正）……資本主義の発展にそくした行政サイドからの要求は明治以来常にあった。他方農民サイドの要求もあり、それをうまくつつみこんだところに農村自治があったのではないか。

◎菅野（俊）……「村の見直し論」のまやかしを明らかにする事実認識としては賛成だが、それは自治とはいえない。村研としては農村自治とはどうあるべきかまで課題としているのではないか。

◎大川……農村自治をどうとらえるかという問題でまちまちなのであるべき姿を統一するところまで行かないのが実情だと思う。

◎細谷……あるべき自治は農民自身が決めることではないのか。地域生活の問題を明らかにすることが我々の仕事であらう。